

入学試験問題 国語

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

夏のある日、俄かに出水がして、リッキは両親と住んでいた土穴からあつという間におし流されてしまいました。悲鳴をあげて、手足をばたばたやりながら、水と一緒にとうとう道端の溝の中まで流されて来ましたが、そのとき運よくそばを流れる一株の草の根にしがみついたまま気を失ってしまいました。ふと気がついてみると、ぐつしより泥まみれのまま、庭の小路に転がってがらがら暑い太陽の光に照らされています。そして一人の少年が立って、「おや、マングースが死んでるよ。お葬いをしてやるうよ。」と叫んでいました。

「いいえ、いけません。」今一人の母親らしい女の人が申しました。「お家へ連れて帰っておやんなさい。きっと死んじやいけませんから。」

そして彼はバンガロウへ連れて行かれました。すると一人の大男が出て来て、いきなり彼を二本の指でつまみ上げて申しました。「まだ死んじやいない。気絶しているだけだよ。」やがてリッキは生綿にくるまれて、炉の傍に置かれました。彼はそつと眼をあけて、クシンと一つくしゃみをしました。すると大男は、「さあ、恐がらせるんじやないよ。どうするか、じつと見ているんだ、いいか。」と申しました。

しかしマングースを恐がらせるなんて、とんでもないことでした。だって彼は頭の先から尻尾の端まで好奇心の塊なのです。マングース一族の標語からして、「走れ、嗅ぎ出せ。」というのであつて、そしてリッキはこれ

でも生粋のマングースだったのですから。彼は生綿をちらと見るなり、こいつはどうも食い物にもならない、と断定しました。まずテーブルをグルツと一回りして、それからすっかり毛並みのお化粧をすませ、身体中をこしごし掻き終わると、いきなりピヨイと彼は少年の肩の上にとび上りました。

「おっと、静かにしておいで、デディ。」と、お父さんが申しました。「そんな風にして人間に馴れるんだから。」

「ウアッ！　だって僕の顎の下をくすぐるんだもの。」と、デディがとび上って申しました。

リッキは少年の襟首に鼻の先をつつこんでみたり、耳の穴を嗅いでみたり、かと思うと床にとび下りてしきりに鼻の頭をこすりはじめました。

「ほんとに野生の獣なんでしょう、お父さん。」と、お母さんが申しました。「きつと、私たちがやさしくしてやつたせいですわね、あんな風になれなくするのは。」

「マングースというのはこうしたものなんだよ。」と、お父さんは答えました。「デディ、お前が尻尾をつかんでつり下げたり、籠の中へ入れたりしなければ、きつと一日中あんな風にして遊んでいるよ。」

そういつて、リッキに生肉の片を与えました。無論、大好物でした。ぺろりと平らげてしまうと、彼はヴェランダへ出て、悠然と日光浴をしながら、身体中の毛並みをいっぱいにくらませて、一本一本十分に根元まで乾かしました。やがてすっかり元気を回復しました。

翌朝も早く、リッキはデイの肩に乗って朝食にヴェランダへ出て来ました。バナナとゆで卵が彼の御馳走でした。そして彼はみんなの膝へ挨拶をして歩きました。家柄のよいマングースはみんなそうなのでした。

いつかは人間の家に飼われて、家じゅうをかけ回るような身分になるので、以前ある将軍のお屋敷にいたというリッキの母親などは、よく暇さえあれば彼に人間に出あった場合の⑧お行儀を躰けておいたものでした。

朝食がすむと、リッキは早速、庭に出てみました。大変な庭でした。半分は荒れたままで、小さい小屋ほどもある熱帯バラの樹や、菩提樹や、蜜柑や、竹やぶ、恐ろしい雑草、そういったものが、むやみに伸びています。

「これはすばらしい獵場だ。」リッキはもうだれを流さんばかりに満足しました。そう思っただけで、もう尻尾は、塙ブラシのようにふくらみ、くんくんむやみに匂いを嗅ぎながら、庭じゅうをかけまわりました。ちょうどその時、かれはふと茂みのなかで、それはそれは⑨悲しそうな声を聞きました。

葉縫鳥のダージー夫婦でした。彼らの巢は大きな木の葉を二枚合わせて、縁を繊維で縫い合わせたもので、その間に生綿や綿毛をいっぱいにつめこんで、とても精巧なものでありました。夫婦は巢の縁にとまって、さも悲しげに泣く度に、巢は風に揺れるように左右に動いています。

リッキは下から、
「どうしました。」と声をかけました。

「私たちは本当に不幸なのです。実は昨日私たちの赤ん坊がこの巢からおこちました。ところが、あのナグの奴めが殺して食べてしまったのでございます。」

「なるほど、それはお気の毒です——だが、僕は新米で一向不案内なんです、そのナグって奴は一体何者です。」しかしダージー夫婦はそれには答えないで、大急ぎで巢の中にもぐりこみました。ちょうどその時でした。茂

みの根元の雑草の間から、何か着物のすれるような、気味悪い、ぞっとするような音がしました。リッキは途端に思わず二足ばかりとび退りました。すると続いて、雑草の間から大きな真つ黒なコブラ蛇、ナグの頭とふくれた首とが少しづつあらわれました。尻尾の先までメートル半はあろうと思えるのが、身体の三分の一ばかりを地面からぬつと宙に浮かせたまま、ちょうどたんぼの花が風に揺れるように、うまく調子をとって揺れています。

そしてあの、何を考えている時でも、決して変わらない恐ろしい蛇の目でリッキをぎろりと睨みすえました。

「ナグは何者だ？ はははは、おれだよ。ナグは。ブラムの大神が昼寝の時、おれたちの御先祖が首をふくらませて、日陰をこさえてさし上げたものだ。お陰で大神はおれたちにちゃんと目印をつけて下さった。いいか、びくびくするな、よく見ろ。」

そういつて彼は一層強く首をふくらませました。なるほど、背中にあの眼鏡の恰好をした模様がはつきりついています。最初はリッキもちよつと尻込みを感じましたが、もとより⑩マングースともあろうものがいつまでもびくびくしているはずがありません。リッキはまだ子供で、生きたコブラにこそ出あった経験はありませんでしたが、母親から幾度も死んだコブラの御馳走になったことはありますし、それに大人のマングースというものは、

蛇と戦って食べてしまうのが仕事だということも、たびたび聞かされていました。無論、それはナグの方でも十分承知の上なので、口では威張つても、心の底ではドキツとしていたのです。

「ふん、目印がなんだ。おい、ひとの巢から難をとって食うって法はないぞ。」

リッキの尻尾はまたしてもふくらんできました。

⑪と、ナグはちよつと何か考え込んだように、リッキの背後のくさむらを穴のあくように見つめていました。マングースがこの庭にはいり込んで来た以上、早晚自分たち一族の滅亡だということはナグも十分承知してました。だがとにかく、相手に油断させることだ、とナグは考えました。そこで彼はこころもち頭を低くして申しました。

「だが君、一つ話があるんだが……リッキ、君は卵を食べるだろう。じゃ、僕が鳥を食ってなげいけなないんだ。」その時でした。突然ダージーが「ほら、後ろ、後ろに気をつけなさいよ。」と叫びました。

リッキは無論ぼんやりしているはずはありません。声を聞くが早いか、彼の身体は地を蹴って力いっぱい高く宙にとび上がっていました。とほとんど間一髪、彼の足の下をナグの妻のナゲイナの身体が投槍のように風を切って流れました。ナゲイナはナグとリッキの間答の間にいつの間にかリッキの後ろに忍びよっていたのですが、しかし恐ろしい最初の一撃が失敗に終わった次の瞬間にはかえってリッキの身体がナゲイナの背にほとんど馬乗りの恰好に落ちて来ました。そこでもしリッキがもつと老巧なマングースだったら、これは無論ナゲイナの背を一噛みで仕留める、またとない好機であつたに違いありません。さすがに子供のリッキには、コブラの立ち直つて来る二度目の突撃がちよつと気がかりだったので、囁むには囁んだが、素早く相手の尻尾を避けてとびのきました。

「やい、ダージーの畜生！」ナグは大声に叫ぶと、力いっぱい茨の枝にかけた巢をめがけて飛びつきましたが、巢はちゃんと用意して蛇の届かない所につくられてあるので、ただ大きく揺れたばかりでした。

リッキは眼の中が熱く真つ赤になつてくるのを感じました。そしてよくカンガルウのするように尻尾と後足ですわって、油断なく左右に身構えました。しかしその時はもうナグの姿もナゲイナの姿も草の中に隠れて見えなくなっていました。リッキの方でも今追いかけて、一度に二匹を相手にするだけの自信もありませんでしたから、別にあとを追おうとはしないで、とにかく家に近い砂利道まで引き返して、⑫次の手段を考えることにしました。とにかく、彼にとっては一大事でありました。

(ラッディアイド・キプリング「リッキ・ティッキ・タヴィ物語」より)

問一——⑬「彼」とありますが、誰のことですか。「のの」という形で答えなさい。

問二 ― ②「こうしたもの」とありますが、マングースとはどういうものと「お父さん」は言っているのですか。説明しなさい。

問三 ― ③「お行儀を躰けておいた」とありますが、なぜですか。文章中のことばを使って説明しなさい。

問四 ― ④「悲しそうな声」とありますが、(1)誰が、(2)なぜ「悲しそうな声」を出しているのですか。

問五 ― ⑤「マングースともあろうものがいつまでもびくびくしているはずがありません」とありますが、その理由を二つ書きなさい。

問六 ― ⑥「と、ナグはちよつと何か考え込んだように、リッキの背後のくさむらを穴のあくように見つめていました」とありますが、「ナグ」は何を考えていたのか書きなさい。

問七 ― ⑦「次の手段」とありますが、「手段」とは「目的を達成するための方法」という意味です。この場合の「目的」とは一体何ですか。

問八 この文章から読みとれる主人公リッキの性格として、最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 好奇心が強いあまり、冷静な判断ができない性格。
イ 好奇心よりも、論理的に考えることを優先する性格。
ウ 好奇心は強いけれど、状況を考えて行動する性格。
エ 恐がりて用心深く、安全を最優先に考える性格。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

みんな、親に対して「くやしい」と思ったことある？

どうしてそんなことを聞くのかと言えば、最近クリニクに相談に来る若い人たちから「親にこんなひどいことを言われました。くやしくてくやしくて許せない」「できれば復しゅうしたい」といったことばを聞いて、ドキリとすることが多いからだ。

たしかに、とくに親に言われたことばに「どうしてそんなひどいこと、平気で言うの？」と思うことは私にもよくあった。というか、実は今でもときどきある。このあいだ、実家に寄ったときも母親を喜ばせようと思って、「今度、この町に近いところに講演に来るんだよ」と教えたたら、「こんな地方に来るなんて、東京で仕事がなくなたの？」と言われて、カチンときた。

でも、そのすぐあと、母親は自分の言ったこともすっかり忘れたように「じゃ、そのときはまたうちに来るわね？なにが食べたい？」などきげんよく言い出したのだ。いつまでたっても「自分の子どもだから、冗談半分にちよつとからかっていい」と思っているんだね。私も今さらくやしがる年でもないし、「あーあ、またか」と聞き流せるようになったけれど、もう少し若かったら「ひどい！じゃ、そのときは絶対、うちなんか寄らないよ！」とどなったと思う。

でも、これは私だけじゃないみたいで、三〇代、四〇代の友だちと集まると、ときどき「どうしても昔、親に言われたあのひとは許せない」という話によく出る。中には今になって「お母さん、私が小学生のころ、どうして“お兄ちゃんはおりこうなのに、あんたはだれに似てデキが悪いのかねえ”なんて言ったの？」と勇気を出して問いたです人もいる。ところが、ほとんどの場合、親は「えー、そんなこと言ったっけ？ぜんぜん覚えてない」とか「お兄ちゃんよりあなたのほうが成績もいいし、いい子だなとずっと思ってたのよ」とか言われ、「私の長いあいだの“くやしき”はなんだったの？」と逆にがっくりきたりするらしい。

子どもはなんでも本気に取るんだから、親とはいえ、冗談半分で傷つくようなことは言わないでほしい。私は「元子ども」としてそう思う。でも、おとなの立場としては子どもたちにも、「親って子どもにはつい気を許して、ほかの人には言わないようなことも言っちゃウイキモノなんだよね。だから、あまり深刻に受け止めないで」と言いたい。

もちろん、おとなに言われたことを「くやしい！」としたり、「今に見てろ！」としたりすることも、人間の成長には必要なことだ。だからといって、何十年も「親は許せない」と思い続けたり、「復しゅうしてやる」と自分が傷つくようなことをしたりするのは、損というものの。「ひどーい！」と怒りながらも、「あー、また言ってるよ」と余ゆうの態度で接するのも「上手な親とのつきあい方」なのかもしれない。

- A 親や先生に言われてくやしかった「忘れられないひとこと」はありますか
- B 親や先生に言われてうれしかった「忘れられないひとこと」はありますか
- C あなたがおとなになったら、子どもや若者にどんなことばをかけてあげたいですか

(香山リカ「10代のうちに考えておくこと」より)

問一 筆者はどのような仕事をしていると考えられますか。次の文の()①②③にあてはまることばを、文章中から書きぬきなさい。

・精神科医として、(①)に来た人の(②)を受けたり、いろいろな場所へ行って(③)を行ったりしている。

問二 ー線部「こんな地方に来るなんて、東京で仕事がなくなったの？」とありますが、筆者の母親はどういう気持ちで筆者にこういうことを言ったと考えられますか。その気持ちが書かれている部分を文章中から二十六字で探し、その最初と最後の五字ずつを書きぬきなさい。

問三 筆者は、「元子ども」の立場から親に対してどうして欲しいと言っていますか。それが書かれている一文を文章中から探し、その最初の五字を書きぬきなさい。

問四 筆者は、子どもは親に対してどういうふうにつきあうのが良いと言っていますか。文章中の言葉を使って説明しなさい。

問五 AとCの問いかけに対する、あなたの意見・感想をあとの指示にしたがって書きなさい。

・AとCの問いかけに対して、一つを選んで書いても、複数を選んで書いてもかまいません。

・字数は百二十字以上、百六十字以内とします。

・原稿用紙の正しい使い方にのっとり、丁寧な字で記入してください。

三 漢字・語句に関する次の問いに答えなさい。

問一 次の①②③④⑤のー線部の漢字には読みがなをつけ、⑥⑦⑧⑨⑩のー線部のカタカナは漢字に直して書きなさい。(必要に応じて送りがなもつけなさい。)

- ① 眼下に美しい山々。 ② 易しい問題ばかりだ。
- ③ 接戦が続いている。 ④ 天高く馬肥える秋。
- ⑤ 先生の指図でみんなが仕事をする。 ⑥ 夜空にギンガが美しい。
- ⑦ 友達に消しゴムをカシテあげた。 ⑧ 台風が接近してボウフウウが心配だ。
- ⑨ 新しいギジュツを取り入れる。 ⑩ 土をタガヤシテ、なえを植えた。

問二 次の文中の「」の言葉が正しく使用されていれば○を、まちがっていれば×をつけなさい。

- ① 彼のシュートの正確さは「生き馬の目を抜く」ようだ。
- ② 「水を得た魚」のようにきれいに泳いでいる。
- ③ 悪口を言われて「腹の虫がおさまらない」。
- ④ 「お茶をにごす」ほど、ひどくにごった水たまりだった。
- ⑤ 校長先生が「おいでになる」らしい。
- ⑥ 先生に対して、父が予定を「おっしゃった」。

問三 次の意味をあらわす四字熟語をそれぞれア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ① 誰に対してもあいそがよい
- ア 平身低頭 (へいしんていとう) イ 八方美人 (はつぱうびじん) ウ 破顔一笑 (はがけんいっしょう) エ 月下氷人 (げつかげいろうじん)
- ② しばしば
- ア 三寒四温 (さんかんしよん) イ 三三五五 (さんさんごご) ウ 再三再四 (さんさんさいしよ) エ 三拝九拜 (さんぱいきゅうはい)
- ③ 似たりよったり
- ア 千差万別 (せんさばんべつ) イ 千變万化 (せんぺんばんか) ウ 同工異曲 (どうこういきよく) エ 岡目八目 (おかめはちもく)
- ④ すぐれた才能や技術をもつ
- ア 一刀両断 (いっとうりょうだん) イ 一世一代 (いっせいちだい) ウ 一生懸命 (いっしょうけんめい) エ 一騎当千 (いっきとうせん)